関西大学FDフォーラム
Vol.12

平成18年6月7日（水）第11回FDフォーラム

第11回FDフォーラム　開催趣旨・概要 …… 2
第11回FDフォーラム　第1部講演要旨 …… 2
第11回FDフォーラム　第2部概要報告 …… 4
第11回FDフォーラム　第2部報告 …… 4
2006年度春学期「学生による授業評価」アンケート報告 …… 6
学会・研究協議会参加報告 …… 10

編集・発行

関西大学　全学共通教育推進機構

FD 部門委員会・授業評価部門委員会

発行日

2006 年 12 月 20 日

〒564-8680　大阪府吹田市山手町３－３－35

Tel 06-6368-1121 Fax 06-6368-0990

http://www.kansai-u.ac.jp/fd/index.html

新しい「出会いの場」としての講義

全学共通教育推進機構長　髙瀬 武典

企業経営に関する講義科目を担当している関係で、人間の「やる気」を引き出すにはどうすればよいか、という話をすることがある。受講生の「やる気」を引き出すのにそれほど成功しているとも思えない自分がこういう解説をするのも後ろめたいので、今年は学生に対して「あなたは、どういうときに『やる気』を感じますか？また、それはなぜですか？」と質問して回答を書いてもらった。1年次配当専門科目の入学直後の授業で質問したのであるが、やる気を感じる対象として一番多かったのが「アルバイト」、その次が「部活動、サークル」などであり、授業や勉学に関するものはさらにその次であった。

では、学生諸君はなぜそれらのことに「やる気」を感じるのだろうか。経営管理や産業社会学の理論では、労働者の「やる気」を引き出すために、賃金体系や人間関係への配慮や自己実現などをあれこれと試そうとする。けれども、今回の学生諸君が重視していたのは「お金」でも「人間関係」でもなく、圧倒的に「新しさ」であった。

たとえば、高校生のときにはできなかったアルバイトに新しくチャレンジしている、部活動で新しい人間関係を結び始めたところである、サークルに入って新しいスポーツに打ち込んでいる、初めて出会った第二外国語に興味を感じて勉強している…等々。上位年次生も、「就職活動にやる気がある――就職面接によって日々新しい発見があるから」、「部活動にやる気を感じる――今まで幹部をやってきた先輩方が引退して自分たちが新たに運営に責任をもつようになったから」といった具合である。

たった一度の質問から一般化するのは無理かもしれないが、学生のやる気を引き出すうえで「新しさ」の重要度がどんどん増してきているように思う。これは、講義科目において、学生の積極的な学習態度をいかに引き出すかという問題にも深くかかわってくるだろう。ここで私が言いたい「新しさ」とは、授業内容から古典を追放せよなどということではなく、授業内容や授業方法を工夫して学生と知識との新しい「出会いの場」として講義を位置づけることである。様々な情報メディアの普及により、情報伝達の場としての講義の存在意義が問われかねない状況となったとしても、教員と学生が向き合う新しい「出会いの場」であるかぎり、大学の講義の意義が失われることはないであろう。

第 11 回 FD フォーラム　開催趣旨・概要

平成18年6月7日㈬14時から17時まで、千里山キャンパス尚文館マルチメディアAV大教室において「教員表彰と教育貢献評価～よりよい授業をつくるために～」をテーマに開催した。第１部は、基調講演で、大阪産業大学副学長・FD委員会委員長　鈴木晶雄先生から「評価から改善そして開発に向けて ── 教え上手な教員表彰制度と教育活動年報発刊 ── 」というタイトルで、大阪産業大学のFD活動の取組とその一環としての「教え上手な教員表彰制度」についての具体的な取組をお話いただいた。第２部は、パネルディスカッション形式により、文学部、社会学部、外国語教育研究機構の各先生方と受講学生諸君に参加していただき、「学生にわかる授業を目指して」というテーマで、授業方法とその環境について議論をした。これらの議論で、教育貢献評価は難しさとその必要性が明らかとなったといえる。

第1部　講演要旨

評価から改善そして開発に向けて ── 教え上手な教員表彰制度と教育活動年報発刊 ──

大阪産業大学教授　鈴木　晶雄

◎教え上手な教員表制度について

出席は取らない、騒いでいても私語は注意しない、遅刻や途中退席も自由、飲食も注意されず、休講が多く補講も行わない、さらに難しいレポートは出さない、試験も持ち込みで超簡単、単位は取りやすく、それもS(A)評価を乱発し、拝んで手を合わせていれば単位がもらえる、まるで神様仏様〇〇先生と呼ばれる先生が学生にとって本当によい授業を提供する教員？

それは大きな間違いである。多くの過去のアンケートから以下の回答を得ている。1. 出席点は考慮してほしい（大学に来る意欲が喚起される）。2. 私語は先生が注意して絶対にやめさせてほしい（うるさすぎる）。3. 教員の教える技術をもっと磨いてほしい（下手くその一語に尽きる）。4. とにかくわかりやすい授業内容にしてほしい（難解で理解できない）。5. わからない学生を小馬鹿にしないでほしい……などの意見がアンケート結果では圧倒的に多かった。このようにキャンパスは極めて真面目で強い勉学意欲を持った学生諸君で溢れかえっているのが現状で教員としては嬉しい限りである。

前半の出席点や私語の問題は初期段階のFD活動でよく取り上げられたテーマのため熱心に議論され、色々な工夫が紹介され実践されるに至っている。また後半の教員の教える技量については、多くの大学の授業評価アンケートで質問項目にあがっている。

このように現在FD活動が定着したおかげで、ほとんどの教員が学生からなんらかの授業に対する評価を受けているが、残念ながら改善に結びついているとは言い難いのが現状である。ある大学で学生と教員の両方に授業に関する相談室を開設したところ、教員からの相談も予想以上に多くあった。このことは学生からの評価を真摯に受けとめた教員が次にどのように改善すべきか真剣に悩んでいることを示唆した結果と受け取ることができる。すなわち、学生にとってよい授業を提供する教員全体のお手本となるような模範教員が行う授業の見学や教員間での教育活動に関する情報交換を望んでいることの表れではないだろうか。

そこで、大阪産業大学では平成17年度から「教え上手な教員」を表彰する制度を発足させた。発足に際してまず確固たる表彰制度の基本構想を決めた。それは「教え上手な教員」に投票できる者は教職員を除き学生のみにしたこと、および選出基準は極めて単純にとにかく「わかりやすい授業」を提供している教員としたことである。詳細な方法論については省略するがインターネット投票などが簡単にできる便利な時代であるため問題なく本制度を導入することができた。

特に学生のみに投票させることについては、学生との信頼関係が基本となるため議論を呼んだ。しかしながら、学生を信じることを前面に打ち出したため、結果的に学生には好印象を与え信頼関係の絆がさらに深まるという副次的な効果まで生み出した。

平成17年度は約100名の教員がノミネートされ選考委員会で9名の教員が選出された。表彰式では、9人9色で9通りの授業方法が紹介されたが、9名に共通する点は基本構想の狙い通り学生にとって、とにかく「わかりやすい授業」を実践していることである。

当初、この「わかりやすい授業」の定義が曖昧との指摘を受けたが、その後の授業見学会に出席すれば一目瞭然で、とにかく「わかりやすい授業」を心がけ、教え方が丁寧且つ精力的で熱心に学生のために授業している教員を学生諸君は間違いなく選んでいた。

◎教育活動年報発刊について

本学でのFD活動の次のステップとして、つまり「評価」から「改善」そして「開発」の段階として、「教育活動年報」の平成18年度発刊を目指した。既述の「教え上手な教員表彰制度」は優れた模範教員を発掘しその教育手法を広めることが主な趣旨であるが、この「教育活動年報」の発刊は、学内の多くの教員が開示した教育方法の情報を個々の教員が共有し、それを参考に新たな授業方法を開拓することを目的とした。

本学には教育活動に熱心な教員、例えば、教育方法に独自の工夫をしている教員、学生との接し方に人一倍苦労している教員が多く在籍している。これらの個々の取組の発掘と事例紹介は、FDフォーラムで始められているがごく一部の紹介に留まり、まだまだ緒についたばかりで決して完全なものではない。また、今までに教員の教育活動に関するデータや資料が統計的に収集されたことはほとんどない。

そこで、FD委員会が中心となって教員の教育に関する種々の取組を集め「教育活動年報」として発刊し個々の教員が実践している優れた教育活動を他の教員にも紹介し、全学的な教育活動の活性化を狙った。その結果、平成18年度分は192名の教員から詳細な情報が寄せられ無事発刊することができた。

今後は毎年発行する教育活動年報を通して教員全体に情報提供を行い、各教員の教育法開発に供し、そこで新たに開発された教育方法も貴重な情報源としてさらに開示していきたいと考えている。

◎最後に

FD活動のかなめは、決して外圧の力ではなく自発的な原動力を持たなければ継続力を失い教育効果の向上は望めない。そのためにも組織的な教員間の情報交換が不可欠となり、大学間の枠を超えた取組が必要となる。その意味でも今回の関西大学FDフォーラムにて基調講演をさせて頂いたことに改めて深甚なる謝意を表して締め括りたいと思います。

（大阪産業大学副学長・FD委員会委員長）

第2部　概要報告

澤井繁男文学部教授、永井良和社会学部教授、靜哲人外国語教育研究機構教授の３先生方と各々の先生方の講義等を受講している（していた）学生諸君の参加のもと、「学生にわかる授業を目指して」でパネルディスカッションを行った。まずは各先生方の教育実践について、授業方法の工夫も含めてお話いただいた。その後、受講学生からの意見や提案を受けた。それらの意見、提案を軸に、パネラーの先生方、受講学生、フォーラムに参加された先生方、さらに大阪産業大学の学生からの意見・提案もあり、積極的かつ前向きな議論が進められた。結論はもちろん出ないが、教員（授業するサイド）と学生（授業を受けるサイド）との教育に対するベクトルが概ね同方向を向いていることは確認できた。これは大きな成果である。これを生かして更なる「わかる授業」を展開できればと考える。最後に、パネラーの先生方と学生さん、さらにご参加をいただいた方々に実り有る議論が出来たことに感謝する。

学生にわかる授業をめざして

文学部教授　澤井　繁男

「わかる授業」をするためには、教える側がその教科をほんとうに理解していなくてはならない。これが案外、忘れられている。相手にある学問的内容を伝えるためには、教師はいっそうの学識と経験を有している必要がある。声量・講義のスピードといった要素も大切だが、学問的知識が確固たるものでなくては、教師自身が自らを欺くことになりかねない。

そのためには、授業の一回性が大切になってくる。言い直しが利かない情況に自分を追い込んで、適度な緊張の下で授業を展開する。板書を用いた、従来からの素朴な授業をしている分には、ごまかしがきかない。学生と面と向かい合っている場で、こちらの身振りや仕草が見られているのであるから、のんきなことは言っておれない。

むずかし理論はなにもない。ただ、授業展開として、メリハリがきいていること、黒板の字が大きくて読みやすいこと、話の間合いの取り方、教師の立ち位置の案配などの考慮・技術は必要であろう。

また、さらに重要なのは、授業にはそうした技量に支えられた「内容」が伴っていることである。中身のない授業はおもしろくないし、スキルだけなら専門学校でもまなべよう。大学はその種の学校とは異なる場であり、深い内実が求められる。もちろん、教える教科にもよるが、文化論などを教授する場合には、「内容」が優先されよう。

教師は司会者の役目もつとめながら、教室の雰囲気を汲み取り、自在に弁をふるって、学生とひとつになって、一定の時間内でリズミカルに教室を運営していくのがよい。

教師にも才能がいるーこれは極論だが、教えることをまず好きになってほしいとおもう。そこから、「わかる授業」へのステップははじまるのではあるまいか。

授業改善は機械化ではない ～停電に負けない授業～

社会学部教授　永井　良和

授業のあり方を改善していくことは、もちろん悪いことではない。改善の方向性を見極めるためにアンケートなどの調査を実施し、データの分析にもとづいて、具体的な改善プランを策定し、実行する。組織的で堅苦しい取り扱いとは別に、教員個人が日ごろ学生と接するなかで、その要望を受けとめて、改良のための工夫をする。そういった積み重ねが、授業をよくしていく。ーだが、このような「前提」こそが再考されるべき時期ではないか。

組織的対応について、たとえば、黒板での情報提供よりプレゼンテーション・ソフトを用いたほうが教育効果が上がる授業もあるだろう。しかし、そうでない形態の授業もある。いっぽう、大学の施設は予算が執行されていくことで更新される。パソコンを用いてプレゼンテーションができるようになるのはプラスだが、黒板が使えなくなることはマイナスである。いまのところ、既存の教室から黒板を撤去するような事態にはいたっていないが、新設の教室ではホワイトボードとプロジェクターしか設置されないことがある。

情報伝達は、電気がないとできないのか。マーカーのような特殊な筆記用具がないと、教えるということは不可能なのか。私は、そうは思わない。停電や故障で授業ができないとすれば、それこそ、改善すべきは授業をする側の姿勢である。パワーポイントのハンドアウトを印刷して配布してもらわなければ、筆箱から筆記用具さえ出そうとしないならば、それは学生の側の意欲や能力を削いでいることになる。

新しい設備に、教授方法を合わせていくだけが求められる方向性ではないと思う。液晶画面ではなく学生の目を見ながら話すこと、そして学生たちが自らの意志でノートをとるような姿勢を保つことを、私は、講義型授業では大切にしていきたい。

InClassRater による授業内リアルタイム評価システム ～学生を暇にしない授業をめざして～

外国語教育研究機構教授　　靜　哲人

学問知識の「内容」の伝達を目的とする通常の講義科目と異なり、運用能力のトレーニングである外国語の授業には、「わかりやすい、わかりにくい」という次元自体がなじまない。なじむのは「力がつく、つかない」という次元である。ではどうしたら外国語の運用能力がつく授業になるかといえば、私の考えでは3つある。

ひとつめは「その題材の日本語訳があらかじめ学生に配布してあっても何の支障もないようなスタイルで授業を行うこと」だ。従来の「講読」は当然失格である。訳があってはやることがなくなってしまう。しかし授業中は題材を自分なりの英語で説明したりさせたり、意見を言ったり、という活動が中心であれば、日本語訳は有用でこそあれ邪魔にはならない。

ふたつめは「教室に座っている90分間のうち、最低でも60分間は学生ひとりひとりに学習目標言語を口にさせること」だ。90分間のうちひたすら日本語を書き取っているような授業では、たとえ100回受けても上達するはずがないことは誰でもわかる。ペアワークの多用により、50人クラスでも、各学生が60分間はなんらかの英語を口にしているような状況を作り出すことができる。

そして最も重要なのが「とにかく学生を暇にさせないこと」だ。現在の平均的大学生には、授業中はいつ当てられるかわからないし、当たったときうまく応答できなければ成績に響く、というプレッシャーを常にかけておくことが必要なのである。このために役立っているのが音読、応答等、およそ学生が授業中に行うすべての行動をその場で評価・記録・集計するためのExcel VBAによる自作プログラムInClassRater である。ラップトップPCを持ち込んで使用するので教室環境を選ばない（図1、図2）。

こうして、だらけていては出せないパフォーマンスを引きだし結果的に学生の英語力を向上させるのが、私の考える日本の大学環境で最も有効に機能する外国語授業である。

図 1：InClassRater の初期画面

図 2：InClassRater で学生を指名したときの画面

商学部　茂木　陽子

今回のFDフォーラムに参加して、大学が熱心に授業改革に取り組んでいると言う事を知りました。大学に入学してから、教育に熱心だと思う先生はごくわずかしかいないと感じていました。しかし、私の出会ってないすばらしい先生方が大勢いらっしゃるのだなという事をこのFDフォーラムで知り、大変嬉しく思いましたし、そういった先生方の下で勉強したいと強く思いました。今回私は運よくこのフォーラムに参加できましたが、他の学生にもこういった大学の努力をもっと知ってもらい、教える側と教えられる側の両方が活気に満ちて質の高い授業を作っていければ、と思いました。

社会学部　佐藤　慶子

今回のFDフォーラムでは「教員表彰と教員貢献評価～よりよい授業をつくるために～」をテーマに何人かの先生に独自の取り組みをお話ししていただきました。

まず始めに、大阪産業大学の鈴木先生から学生にとって本当に教え上手な教員とはどういう人物なのか、そして大学でのFD活動についての講演がありました。

私も以前から感じていた事ですが、大学には大変ためになる授業と、出席しなくても単位がとれる授業があります。そして関西大学でも授業評価アンケートが行われていますが、大教室に3、4人しかいない授業であっても良い評価をされる場合もあれば、為になる授業であっても真面目に聴いていない学生に悪い評価をされることもあります。このような評価制度に本当に意味があるのだろうか、と前々から感じていただけに、関西大学でもFD活動がもっと議論され、取り入れられるべきだと私は思います。

次に、実際に授業で工夫している事柄について、3人の先生方からお話がありました。普段は何げなく受けていた授業ですが、それは先生方1人ひとりの教育に対する考え方や常に学び続ける姿勢、そして向上心の上に成り立っています。こういった先生方の熱意や努力は、今回のFDフォーラムに参加していなければ知ることができなかったかもしれません。しかし、授業をより良いものにするために、まずは私たち学生が先生方の思いをしっかりと受けとめ、それに答えていかなければなりません。つまり、良い授業は教授と学生が一緒に作っていくものだという意識を持ち、前向きな意見を交換する必要があります。そして一部の先生だけではなく、もっと多くの先生方、学生がこのようなフォーラムに参加し、積極的に授業づくりを行おうと思えることが、授業をよりよくするための第一歩であると強く感じました。

文学部　藤井　明子

今回のFDフォーラムにパネリストとして参加し、授業改善の取り組みが行われていたことをはじめて知りました。会場を見回してみても、学生は見当たりません。日々の授業において質の向上を測る素晴らしい活動であるにも関わらず、学期末に実施されている授業評価がFD活動の一環との認識が低いからではないかと思いました。大学HPだけでなく、インフォメーションシステムにも公開し、もっと学生と歩み寄るべきではないでしょうか。

2006年度春学期　アンケート報告

学生による授業評価

中邑　光男

◇実施状況

より質の高い教育を行うためには、直接学生の声を聞き、それを授業に反映させることが必要であるとの認識に立って、その有効な手段である「学生による授業評価」を全学的に実施する。

◇実施期間

2006年6月12日（月）～6月24日（土）

◇対　象

(1)　デイタイムコース及びフレックスコースの平成18年度春学期開講の講義科目（教養科目・保健体育科目・専門教育科目）、外国語科目（日本語を含む）及び体育実技科目を対象とする。ただし、複数担任科目（オムニバス・リレー授業）は除く。

(2)　専任教育職員及び非常勤講師を対象とする。

◇全体の講評

関西大学では、上記の趣旨・目的に沿い、2000年後期より「学生による授業評価」を全学的に実施している。本稿は 2006年春学期の「学生による授業評価」アンケート実施結果について報告するものである。なお本稿では、2006年度春学期のアンケート調査結果を、2005年秋学期の結果ではなく、2005年春学期の結果と比較する。これは、「関西大学FDフォーラム」においてこれまでも指摘されてきたように、春学期と秋学期のデータは多くの点で非常に異なり、この2つを比較することは適当でないと考えるからである。

1. 実施状況

表1は、2006年度春学期の「学生による授業評価」アンケートの実施状況をまとめたものである。この表と、実施率と回答率の経年変化（春学期のみ）を示した図1を見ながら、2006年春学期の「学生による授業評価」アンケートの実施状況とその変化を調べていこう。

まず、アンケートを実施したクラスの割合を表す「実施率」は、91.9%であった。このことからほとんどの科目でアンケートが実施されていると言えよう。

表１：アンケート実施状況

			講　　義	外　国　語	体 育 実 技	全　　体
春学期・前期終講科目	対　　象	a. 科目（クラス）数	1,636	1,549	169	3,354
		b. 学生数	207,133	49,555	6,331	263,019
	実　　施	c. 科目（クラス）数	1,408	1,516	158	3,082
		d. 回答者数	79,333	40,892	4,450	124,675
	実　施　率	c÷a	86.1%	97.9%	93.5%	91.9%
	2005年春学期比		-1.1%	0.4%	-2.8%	0.6%
	回　答　率	d÷b	38.3%	82.5%	70.3%	47.4%
	2005年春学期比		0.4%	0.6%	-9.6%	0.3%

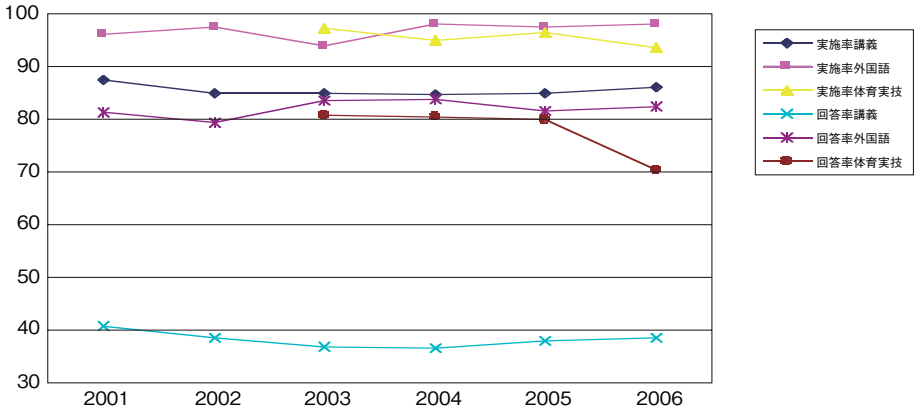

図１：授業評価アンケート実施率・回収率の変化（春学期のみ）

具体的には、「講義」での実施率は86.1%であった。2005年の実施率85.0%からさらに上がっており、高い数字を示している。「外国語科目」の実施率はこれまでも高いが、このアンケートでも97.9%のクラスで実施されており、その傾向を確認することができる。「体育実技」も2005年に比べると実施率が2.8%下がっているものの、依然として、93.5%と高い数字を記録した。

一方、学生の延べ人数によって算出した「回答率」は47.4%であった。この数字は2005年から微増したものの、これまでのアンケートと同様に、協力を得られた学生数が調査該当数の半分にも満たなかったことを示している。

具体的には、「講義」での回答率が、「外国語科目」や「体育実技」での回答率と比べて、際立って低い。図1から分かるように、この傾向は、アンケート開始時から一貫して見られるものであり、「講義」での回答率が40%を超えたのは2001年春学期だけである。「学生による授業評価」アンケート結果をさらに有用なものにするためには、適切なクラスサイズの検討も含めた、「講義」での回答率を有意義に高める方法を模索するべきだろう。

表2は、アンケートの実施状況を学部・コース別に示したものである。

「実施率」については、総合情報学部を除いて、どの学部も90%を超えており、高いといえよう。2006年の全体の実施率は、工学部と総合情報学部での実施率の上昇もあり、2005年春学期よりも0.6%高い。

「回答率」を見ると、文学部と工学部で50%を超えているものの、他の学部はおおむね40%前半の回答率であった。アンケートの回答率が低いという問題点は、ほぼ全ての学部に共通して見られるといえる。

表２：学部別アンケート実施率・回答率

	デイ法	デイ文	デイ経	デイ商	デイ社	工	総情	フレ全	保健体育	計
実施率	90.4%	93.1%	93.5%	95.1%	92.9%	93.4%	86.2%	87.9%	93.1%	91.9%
2005年春学期比	+2.4%	-0.7%	-2.1%	+0.8%	-2.3%	+4.1%	+2.8%	-1.6%	-3.4%	+0.6%
回答率	41.4%	55.6%	45.9%	43.5%	43.8%	51.6%	44.5%	44.2%	68.0%	47.4%
2005年春学期比	+1.1%	+2.8%	-0.7%	+1.4%	-3.0%	+2.4%	+5.5%	-2.9%	-6.6%	+0.3%

2. 全体的傾向

全学の3,082のクラスについて、のべ263,019人を対象とする「学生による授業評価」アンケート結果を次の手順で分析する。

データの集約は、次の手続きに従った。共通質問項目数は12で、「⑤強くそう思う、④そう思う、③どちらとも言えない、②そう思わない、①全くそう思わない」の5件法で評定する。まず質問ごとにその項目に属する全クラスの個々の評定平均値を、0.5の値の間隔でグループ化し、8つの評価段階に分類する。次にその評価段階に対して、A＋（5.0～4.5）、A（4.5～4.0）、B（4.0～3.5）、C（3.5～3.0）、C－（3.0～2.5）、D（2.5～2.0）、E（2.0～1.5）、E－（1.5～1.0）というラベル付けを行った。なお、境界の値は上の評価段階に入れた。

図2は、質問項目ごとに、クラスの評価平均値の分布（割合）を示したものである。質問項目は、評価平均値の大きさに基づき、評価の高い項目が上の方に、評価の低い項目が下の方にくるように並び替えられている。

図2からアンケート結果を見ていこう。まず「出席⑽」に関する質問の評定平均値が90％を超えるクラスでA以上の評価を得ており、際だって高いことが分かる。この結果とアンケートの回答率が47.4%であったことを考え合わせると、授業に非常によく出席している学生とそうでない学生がおり、アンケートに回答したのは前者のグループの学生であると推測できよう。つまり、延べ人数で過半数の授業にあまり出席していない学生の授業評価は、本アンケート結果には反映されていない。この点は以下の考察全てに関連する重要な点である。

以下、「各項目のクラスごとの評価平均の分布」の詳細を、グラフの上から下に向かって、「要項⑴」から順に見ていこう。なお、適宜、筆者の考察を付け加える。

「要項⑴」の結果は約95%がB以上の評価を与えており、2005年の調査結果と同じく、評価の高い項目となった。これは教員が「シラバス」を提示し、それに従って授業を進めるという授業が安定的に実施されていることを意味するといえる。

「声⑶」についても90%を超えるクラスでB以上の評価であり、2005年春学期の調査結果とほぼ同じ結果を示している。教員の声の大きさが十分であるかどうかは基本的な授業スキルであることを考えれば、われわれ教員はC以下の評価を毎年少しでも減らすことが必要であろう。

「熱意⑷」は、2005年に7位であったものが2006年

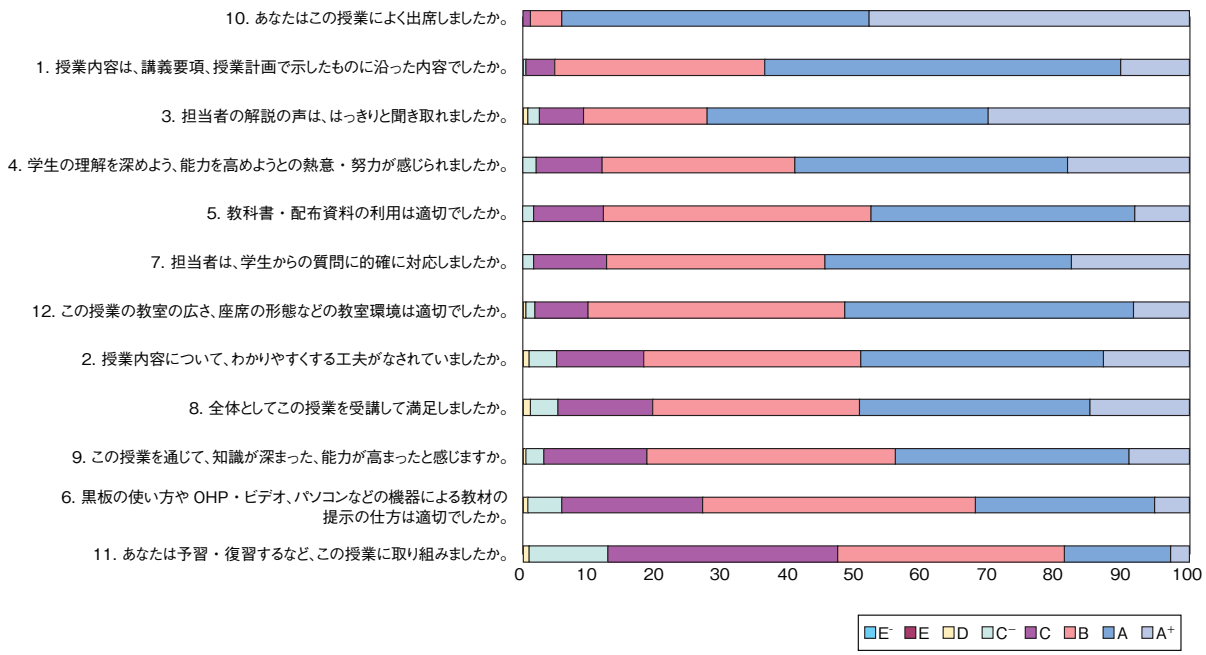

図２：各項目のクラスごとの評価平均の分布

では4位と上昇している。熱意は、教員が表現するだけではアンケート調査には正確には反映されない。学生が授業内容や教員の姿勢に注意を払わなければならず、そのためには、学生と教員との間に一定のラポールが構築されていることが前提となろう。このように考えれば、この項目の順位が上がったことは喜ばしい結果である。

「教科書(5)」については、B以上の評価は高いものの、相対的に、A以上の評価が少なくBの評価が目立って多い。教科書や配付資料は教師による授業の工夫が特徴的に表れるところである。教員が、教科書や配付資料を今後より適切に利用し、Bの評価をA以上の評価に改善することが望まれる。

「質問(7)」の評価平均も2005年とほぼ同じである。この項目と「熱意(4)」と比べると、B以上の評価の割合はほぼ同じだが、A評価が少なくB評価が多いと分かる。教員の熱意を学生が感じるかどうかは、質問をどう取り上げるのかという点も関係するに違いない。「熱意(4)」を「質問(7)」に効果的に反映させたい。

「教室(12)」については約90%のクラスがB以上の評価をしており、教室の広さや座席の形態について適切であると回答している。なお、この項目は各評価点の分布を含めて2005年とほぼ同じ結果を示している。「教室(12)」は物理的な条件が変化しなければ大きな改善は望めないと予想されるが、アンケート結果はそれを裏書きしている。

「工夫(2)」の項目から「知識深化(9)」については、B以上の評価が少なくなり、学生の評価は相対的に厳しいものとなる。しかし2005年と比較すると、3項目とも改善傾向を示している。

「工夫(2)」については、B以上の評価はわずかであるが2005年よりも上昇している。特にA＋の評価が上昇していることが注目される。

「満足(8)」についてはB以上のクラスが80%を超えており、この数字は2005年から3%程度上昇している。

「知識深化(9)」でもB以上のクラスが80%を超えている。2005年と比較すると、B以上の評価の割合はほぼ同じだが、B評価が減りA評価のクラスが増えている。

「教材提示(6)」についてはC以下のクラスが30%あり、学生の評価はさらに厳しいものとなった。近年の傾向として効果的な教材提示方法を求めて、教員がパワーポイントや映像機器等を用いる傾向が強い。実際、この分野のハードの進歩はめざましい。しかし、アンケート結果は、このような機材の使用が必ずしも高評価につながるわけではないことを示唆しているといえよう。現在の学生は最新の機材を使った授業そのものには慣れており、教材を使用すること自体を評価することは少ないのかもしれない。授業の内容や教室環境に合わせて、映像機器機材を適切に使い分けることが、教員にますます求められていると感じる。

「取り組み（11）」は約47%のクラスがC以下になっており、評価の低さは顕著である。しかし、C以下の数字が2005年から3%近く減少していることは重要である。2005年は2004年から5%近く減少していることを合わせて考えれば、C以下のクラスはこの2年間で約8%減少している。本学の学生数を考えれば、この数字は意義深いものといえよう。

以上の結果を総合的に考察すると、2006年のアン

ケート調査結果は一見すると2005年から大きな変化はないように思えるが、質問項目ごとに詳細に分析すると、教員の授業改善のための努力がより多くの学生に認められているといえよう。B以上の評価の割合が2005年と大きく異ならない項目についても、その内訳を見れば、A以上の評価が増加している項目が多い。このような教員の努力は、「取り組み（11）」の評価が地道だが着実に上昇していることに反映されていると思われる。

今後は、「教材提示（6）」のような比較的評価の厳しい項目を重点的に改善することが、質のより高い授業を提供することにつながるだろう。

表３：担当教員の所属ごとのクラス評価平均の標準値 3.0 からのずれ

	法	文	経	商	社	工	情	外	全平均
1. 授業内容は、講義要項、授業計画等で示したものに沿った内容でしたか。	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	○○	○○○	○○○	4.0
2. 授業内容について、わかりやすくする工夫がなされていましたか。	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	3.7
3. 担任者の解説の声は、はっきりと聞き取れましたか。	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	○○	○○○	○○○	4.0
4. 学生の理解を深めよう、能力を高めようとの熱意・努力が感じられましたか。	○○	○○○	○○	○○○	○○○	○○	○○	○○○	3.9
5. 教科書・配付資料の利用は適切でしたか	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○○	3.8
6. 黒板の使い方やOHP・ビデオ、パソコンなどの機器による教材の提示の仕方は適切でしたか。	○	○○	○○	○○	○○	○	○○	○○	3.6
7. 担任者は、学生からの質問に的確に対応しましたか。	○○	○○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○○	3.8
8. 全体としてこの授業を受講して満足しましたか。	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	3.7
9. この授業を通じて、知識が深まった、能力が高まったと感じますか。	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	3.7
10. あなたはこの授業によく出席しましたか。	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	4.4
11. あなたは予習・復習するなど、この授業に意欲的に取り組みましたか。	○	○	○	○	○	○	○	○○	3.3
12. この授業の教室の広さ、座席の形態などの教室環境は適切でしたか。	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○○	3.8
1～12の全体平均	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○○	3.8

ここでの所属は、授業を担当する専任教員の所属と非常勤講師などの推薦母体となった学部・外国語（教養科目・保健体育科目・教職専門教育科目だけの担当者は文学部）である。クラス評価平均値の標準値3.0からのずれを0.4きざみに図表化したもので、○1つにつき1段階上がり、▼1つにつき1段階下がる。

2005年度春学期調査（第10回調査）結果より○が減ったことを表している。

2005年度春学期調査（第10回調査）結果より○が増えたことを表している。

3. 担当教員の所属別状況

表3は、質問1から質問12までの項目に対して、各学部におけるクラス評価平均値を標準値3.0の差を学部ごとに示したものである。

項目(1)～(7)は、大まかに言って、授業スキルに関するものである。全ての質問について、どの学部でも標準値より高い評価を得ていることがわかる。2005年と比較すると、「要項(1)」と「熱意(4)」がそれぞれ0.1上昇し、全体的に上昇傾向が見られる。

学部に目を移すと、法学部が2項目、外国語機構が1項目で評価を下げているものの、商学部、社会学部、総合情報学部がそれぞれ1項目で評価を上げている。そのためもあり、全般的に外国語機構と文学部の評価が高いものの、工学部を除いた他の学部との間に大きな差はないといえよう。

項目(8)と(9)の結果からは、学生が授業内容そのものをどう評価したかを知ることができる。これらの項目は標準値よりも十分に高い数値を示しているが、授業スキルに比べると相対的に低くなっている。この２項目については、全ての学部が同じ評価を得ていることも興味深い。

項目(10)と(11)は出席や学習意欲に関する項目である。「出席(10)」に関しては上述の通り全学部において非常に高い評価が与えられている。ところが、授業によく出席する学生であっても「取り組み(11)」の評価は依然として低い数字に留まっている。この中で2003年春学期から2005年秋学期まで継続して標準値3.0を下回った社会学部が、今回、標準値に達したことは注目されるべきであろう。

最後の項目(12)は教室環境に関する質問である。2006年は2005年と同じ評価を示した。全学部で同じ評価であったことも2005年と変わらない。

今回の結果を総合すると、1～12の全体平均では、2005年の3.5から3.8へと上昇している。評価が比較的大きく向上したといえるだろう。学部間で比較すると、総じて外国語機構の評価が高く、文学部、商学部、社会学部がそれに続いている。反対に評価が低かったのは工学部で、「出席(10)」を除いて、○3つの評価項目はなかった。

今回の調査でも、全ての学部において「出席(10)」の評価の高さと「取り組み(11)」の低さの違いが目立つ結果となった。授業によく出席する「勤勉な学生」を、自主的に予習・復習に取り組む「自立した学習者」へと変容させるには何をするべきなのかを、教員は今後とも模索し議論していかなければならないだろう。

（商学部教授）

学会・研究協議会参加報告

池田　勝彦

① 大学教育学会第 28 回大会

大学教育学会第28回大会が2006年6月10日（土）、11日（日）に、東海大学湘南校舎で開催された。FD・授業評価部門委員長という役を担当させていただいているので、FD・授業評価を研究対象としている学会に参加することも意義あることと考え参加させていただいた。ただ、大会初日の土曜日は大学での講義等のために出席できず、2日目（日曜日）の大会に参加した。2日目は自由研究という形の講演が午前中に開催された。自由研究はⅠからⅥまでのセッションに分かれており、ⅠからⅥまでのテーマは「初年次教育」、「授業法」、「科学教育・e-learning」、「評価・FD（1）」、「評価・FD（2）」、「教育論・英語教育・キャリアサービス」であった。FDと授業評価関連のセッションは同時間に2つが並行開催で、どちらを聞くかを選択するのは非常に困難であったが、「FD・評価（2）」セッションの講演に「教員メンターによる授業参観の取り組み」と「学生は『授業アンケート』をどう思っているか---- 自発的な調査による学生のFD活動への参加----」という講演があったことで、このセッションの講演を聴くことにした。

「FD・評価（2）」の講演は次のような講演があった。

1　認証評価制度の現状と課題
山崎　その（同志社大学大学院）

2　日本における学士課程教育の自己評価
── 評価基準としての教育成果
串本　剛
（広島大学教育学研究所／日本学術振興会特別研究員）

3　教員の省察をもたらすFDプログラムの在り方
── 談話分析を手がかりとして ──
佐野　享子（筑波大学大学教育センター）

4　教員が納得するFD活動のあり方とは
── 東海地区40大学におけるFD活動の事例を手がかりに ──
青山　佳代（名古屋大学評価企画室）

5　TA教育とメンターリング
宇田川　拓雄（北海道教育大学函館校）

6　教育メンターによる授業参加の取り組み
佐藤　龍子（静岡大学大学教育センター）
阿部　圭一（愛知工業大学経営情報科学科）

7　学生は『授業アンケート』をどう思っているか
── 自発的な調査による学生のFD活動への参加 ──
三浦真琴、佐藤龍子、山本さつき
（静岡大学大学教育センター）

以上の講演で特に興味深かった5、6、7についてその内容を簡単に説明する。

「TA教育とメンターリング」はカリフォルニア州立大学バークレー校（UCB）で行われている先進的授業の「入門化学授業Chem1A」についての調査報告である。約1200の学生に対して講義、ディスカッション・クラス（少人数､30名程度）、実験クラス（少人数、30名程度）でトータルに教育するシステムである。ディスカッション・クラス、実験クラスは60名のTA（大学院生）が主体的に担当している。これらを統括するのが講義担当の教員である。UCBでは大学院で「ティーチング」を教える科目の開設が義務付けられている。UCBではTA（UCBではGraduate Student Instructor, GSIと呼ばれている）はティーチングの実践だけでなく、その教育も受けるという形態をとっている。TAに対して授業担当教員はメンターとなる。メンターであるが、人を導き、守り、はぐくみ、支え、人生の新しい段階への変転をもたらす行動をとる人物とされる。「教育すること」を大学院の正規科目と位置づけることでTAを行うことのメリットは非常に高くなる。このような制度が本学の適応化可能かどうかは別として、TA活用を考える上で重要な情報であると思われる。

「教育メンターによる授業参加の取り組み」は「授業参観の取り組む」でも非常にユニークなものである。つまり、「キャリアデザイン」という授業について、教員が14回のうち13回出席して、各授業終了後メール等でその感想を担当教員に報告したというものであった。しかし、これは特殊な例であるとも報告している。つまり授業参観を希望した教員は退職して後、私立大学で教鞭をとる予定の教授で、キャリアデ

ザインは必要であるということを痛感していたことにより、「勉強したい」ということが根底にあり、授業を受け続けることになったということである。このような状況は稀であるが、有効な授業参観を行うには複数回（5回程度）の授業参観が必要であり、メンターとしての意識を持った参観者が必要であることの指摘もあった。

最後の「学生は『授業アンケート』をどう思っているか ― 自発的な調査による学生のFD活動への参加 ― 」はFD活動への学生参加についての取り組みの一つであるが、これもかなりユニークな取り組みの報告であった。FD関連の委員会に学生が参加している取り組みはいくつかの大学でも実施されているが、本報告は学生の卒業論文のテーマとして学生が「授業評価」の信頼性を、学生を対象に調査した結果であった。その結果「全体として、学生は素直に、そして、真面目に授業評価を行っているということがわかった。学生にとっての「良い授業」は評価できる授業でもあり、ラクな授業という安易なものではなかった。ただし、学生の半数は授業評価の結果が授業に反映されていないと考えている。学生による授業評価の結果は信頼できるものであることがわたったので、これからも授業改善に活用すべきである。」と結論を導きだしてきている。この結論からFD活動に対して、学生の参加を視野にいれるべきであり、そのような学生を育てていくべきだということを提案されている。しかし、学生がFD活動の一翼を担う存在にまで育てるには、大学自身がそれなりの方策を出さなければならないことも事実であるという点も指摘されている。本学でもFD活動への学生の参加は重要であるということについて少なくともFD部門委員会では議論されている。しかし、FD活動の担う手となってもらえる学生は大学が育てる必要があるという点については、本学にあった形での対応について今後議論する必要があると思われる。最後に卒業論文作成者の山本さつきさんが言われた内容で印象深かったのは「始めは、まったくFD活動には関心がなく「先生らが勝手になにかやっている」程度であった。しかし、「FD研修会」に参加して、「先生らもがんばっているようだ」と思えてから、徐々にFD活動に関心が持てた」である。これは学生らにFD活動について知ってもらう機会を作り、さらにその内容が学生らの目に留まることが重要であると考える。

以上、長々と報告してきたが、本学のFD活動に関して少しで参考になれば幸いである。

② 近畿地区大学教育研究会第 75 回研究協議会

近畿地区大学教育研究会第75回研究協議会が2006年9月9日（土）に華頂短期大学で開催された。基調講演として、国際基督教大学名誉教授絹川正吉先生による「『大学の学校化』時代における教養教育」があり、午後からパネル討論（第一部会）として「教養教育に新たな可能性に向けて」というテーマで「工学系大学における倫理教育」（名古屋工業大学助教授藤本温先生）、「自然科学教育の意義について ― 学生にとって、研究者にとって ― 」（慶応義塾大学教授表實先生、「世界を逆方向から見る；教養科目としてのアラビア語」（京都大学教授岡真理先生）の講演があった。また、事務部会（第二部会）「大学職員による教育支援の現状とあり方」（華頂短期大学教学事務部長高田美恵子氏）の講演もあった。

ここでは基調講演のみについてご報告させていただく。大学の「学校化」、つまり中等教育の延長に位置づけられ、継続性を重視される教育が必要となった大学で教養教育は何をなすべきであるかという点を、国際基督教大学での取り組み「責任ある地球市民を育むリベラルアーツ教育」（特色GP）を中心に講演された。また、現在の教養教育の背景となる日本における教養教育の歴史についても講演された。

絹川先生は自己形成を目指す「教養教育」は教育でないので、もはや不成立である。一般教育に徹底すべきである。学士教育の三要素は「リテラシー・世界認識・自己実現」であるから学士課程カリキュラムの構成原理は学術基礎教育と一般教育となる。ICUでの学術基礎教育は「専門教育による直接的な知識・技能の修得でなく、disciplinesの学習を通して『批判的分析思考能力』等の基礎的アカデミック能力の訓練」と定義されている。本学でも共通教育について継続的な検討を行っているので、一般教育の先進的大学について更なる調査と、その一般教育を受けての専門教育についての議論も進める必要があるかもしれない。本講演が教養教育学（教育学）に係わる内容であったため、著者の能力の範囲を超えるものであり、このような報告になったことをお詫びする。

（FD部門・授業評価部門委員長）

掲示板

第12回FDフォーラムを開催

学生の皆さんの参加歓迎!

●テーマ

「みんなのFD
— 授業評価アンケートの
現状と展望 —」

日時◆平成 18 年 12 月 20 日㈬
午後 1 時 30 分～ 4 時

場所◆千里山キャンパス
第 2 学舎 4 号館 BIG ホール 100
高槻キャンパス
大学院棟 TD106 教室（同時中継）

プログラム

第 1 部
◆基調講演
「授業評価アンケートの現状について」
報告者：池内裕美　【社会学部助教授】

第 2 部
◆講演とパネルディスカッション
「授業評価アンケートの取組の将来展望
— アンケートから FD 活動へ」
講　師：三浦　真琴氏
【静岡大学・大学教育センター（FD 部門）教授】

■ 活動記録

2006. 6. 7	第11回FDフォーラム開催
2006. 6.12 ～ 6.24	2006年度春学期「学生による授業評価」アンケート実施
2006. 6.16	平成18年度第3回FD部門授業評価部門委員会
2006. 6.30	平成18年度第4回FD部門授業評価部門委員会
2006. 7.21	平成18年度第5回FD部門授業評価部門委員会
2006. 9.20	「TAを活用した授業」説明会開催
2006. 9.25	平成18年度第6回FD部門授業評価部門委員会
2006.10.16	平成18年度第7回FD部門授業評価部門委員会
2006.11.13	平成18年度第8回FD部門授業評価部門委員会
2006.11.16 ～ 11.22	平成18年度公開授業週間
2006.11.24 ～ 12. 7	2006年度秋学期「学生による授業評価」アンケート実施
2006.12. 4	平成18年度第9回FD部門授業評価部門委員会

■ FD部門・授業評価部門委員会委員

部門委員長　池田勝彦　工学部教授

委員
藤原稔弘　法学部教授（2006.10.1 ～）
森本哲郎　法学部教授（～ 2006.9.30）
黒田一充　文学部助教授
林　宏昭　経済学部教授（～ 2006.9.30）
北原　聡　経済学部助教授（2006.10.1 ～）
中邑光男　商学部教授（～ 2006.9.30）
笹倉淳史　商学部教授（2006.10.1 ～）
池内裕美　社会学部助教授
谷本奈穂　総合情報学部助教授
カイト　由利子　外国語教育研究機構教授（～ 2006.9.30）
山根　繁　外国語教育研究機構教授（2006.10.1 ～）
川口美貴　法務研究科教授
石川勝彦　教務センター授業支援グループ長（2006.10.1 ～）
土橋良一　教務センター次長（～ 2006.9.30）